MUSEUM PRESS

鳥取県立博物館ニュース

Newsletter of the Tottori Prefectural Museum

MARCH 2006 No. 1

平成18年3月発行

特別展

東京都写真美術館コレクション展

「写真都市パリ」 …… 2

特別展

「女ならでは世は明けぬ－江戸・鳥取の女性たち－」 …… 3

表紙写真：黒麻地几帳桐文様帷子（奈良県立美術館蔵）〈展示資料〉

企画展「遠い海」 …… 3

［自然］観察ガイド「浦富海岸」

資料紹介「巨大オオサンショウウオの液浸標本」 …… 4

［人文］資料紹介「大正期の太陽系模型」、コラム「『犬米』のはなし」 …… 5

［美術］新収蔵品紹介「辻晋堂《縄文》」、コラム「染色作家が書いた本」

連載「学芸員という仕事 第1回」 …… 6

ニュース「新しくなった『山陰海岸学習館』」、常設展示、巡回展 …… 7

講座・観察会・アートシアター、展覧会カレンダー …… 8

Tottori Prefectural Museum

鳥取県立博物館

◎「MUSEUM PRESS 鳥取県立博物館ニュース」の発刊にあたって

館長　谷口博繁

県立博物館は、開館して今年で34年目を迎えました。

その間、館の調査研究・普及活動の状況、資料・作家の紹介等、館の動向をお届けする普及誌として、「郷土と博物館」は通算して50巻（通巻94号）の発行に達しています。

お読みいただいた方々から近年特に、もっと大きな版やページ数の削減で読みやすいものに、カラー印刷化してはどうか、活動結果より今後の開催情報を重点に掲載してほしい、など数多くの要望が寄せられていました。

そこで、館の中で研究報告、年報との役割を明確にしながら、今後展開する事業・講座等の見どころや日程の紹介、展示資料のビジュアルな解説など、県立博物館にご来館される際に参考になる情報に重点を置き、これまでの普及誌「郷土と博物館」をリニューアルして、お届けすることとしました。

この新普及誌「**MUSEUM PRESS 鳥取県立博物館ニュース**」は、館のホームページでもご覧いただけるようにしております。

これまで以上に事前の情報提供、予備的な学習の情報誌として活用していただき、ご来館の折りに鳥取県の自然・歴史・美術について、より理解を深めていただければと思っているところであります。

特　別　展

東京都写真美術館コレクション展

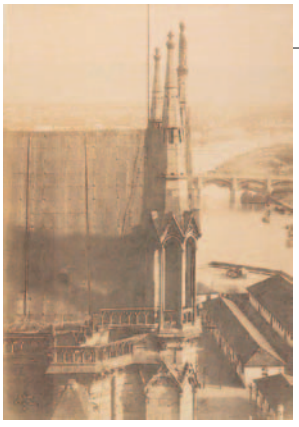
写真都市パリ

今、鳥取県立博物館では、開館以来初めての本格的な写真展覧会「東京都写真美術館コレクション展　写真都市パリ」を開催しています。これは、日本最大級の写真専門美術館である東京都写真美術館の所蔵品により、フランスの写真の歩みを振り返ろうとする企画です。

ところで、タイトルに冠した「写真都市」という言葉から、皆さんはどんな内容を想像されますか。多くの写真に表現された、ロマンティックなパリの情景を思い描かれる方もたくさんいらっしゃると思います。

現代の社会において、写真ほど、私たちに親しい視覚メディアはありません。絵画を見ない日があっても、写真を見ない日はないでしょう。それほどまでに身近となった写真が生まれたのは、1839年のパリでのことでした。それから170年近くたった今日まで、パリという都市は、多くの写真家や写真を愛好する人々を育て、写真文化を豊かに発展させていったのです。

ジャン・ウジェーヌ・オーギュスト・アジェ《日食》1911年（東京都写真美術館蔵）



ジャン＝ルイ・アンリ・ルセック《パリ、ノートルダム寺院》1851年（東京都写真美術館蔵）

今回の展覧会では、写真文化の土壌となった社会背景も紹介しながら、写真というメディアと深く結びついた都市・パリの姿をお伝えしたいと思っています。

さて、本展に出品されているのは、写真誕生後まもない1840年代から、多様な写真表現が現れたエコール・ド・パリ時代（1910～30年代）を経て、1960年代に至るまでの約100点の写真です。展示室を大きく2つのパートに分け、前半部分では19世紀の社会と写真の関わりを、後半部分では、マン・レイやドアノー、アンリ・カルティエ＝ブレッソンなど、20世紀を代表する写真家の作品をご紹介いたします。いずれも、ぜひ多くの方々にご高覧いただきたい、写真史に残る名作ばかりです。

この機会に、写真が近代社会に果たしてきた大きな役割や、写真の持つ可能性や魅力について、改めて思いをはせていただくことができればと希望しています。

（美術担当学芸員　竹氏 倫子）

特別展　東京都写真美術館コレクション展
写真都市パリ

■会　期　3月11日（土）～4月16日（日）無休
■会　場　2階　第1・2特別展示室
■入館料　一般 500円（団体 300円）
■関連行事
・ギャラリートーク（会場：展示室）
　3月21日（火・祝）、4月1日（土）14時～
・特別講演会「**パリ・写真の世紀**」
　3月26日（日）14時～16時
　会場：当館2階講堂、無料
・VTR上映会
　「**アンリ・カルティエ＝ブレッソン ー疑問符**」
　4月8日（土）11時～、14時～、16時～
　会場：当館2階講堂、無料

特別展

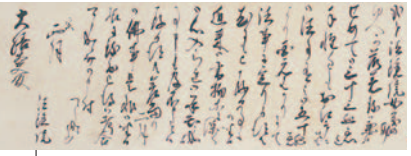
女ならでは世は明けぬ ―江戸・鳥取の女性たち―

女性の美意識や社会的な地位は、その時代の特徴や考え方を反映してきました。女性の活躍めざましい現代に生きる我々の目から、昔の女性たちの生き方は、どのように映るのでしょうか。本展覧会では、江戸時代の歴史をひもとき、三つのテーマから女性たちの実像を紹介します。

女性美を代表するキモノ、その原点といわれる小袖をはじめとして、江戸時代は女性ファッションが花開いた時代でした。より美しいものを求めるニーズによって、さまざまな文様や、独自の装飾様式が生み出されていきます。第一部では装飾性が高まっていく衣装を中心に、化粧道具、装身具、髪型、絵画作品などを展示し、華やかな女性美とファッションの変遷をたどっていきます。

雑蒔絵旅鏡台（当館蔵）

第二部では鳥取ゆかりの女性たちに焦点をあてます。江戸時代、32万石を有した大名池田家の姫君たちに関連した資料を全国から集め、華やかさばかりではなかった姫君たちの知られざる素顔を紹介します。



法鏡院書状綴り〈部分〉（重要文化財、毛利博物館蔵）

さらには、殿様・姫君たちに仕えた奥女中たち、優れた和歌を詠み、あるいは諸国巡礼の旅日記をつづった豪農の女性、自然と向き合い、田畑での労働に明け暮れつつも、開放的に生きた農村女性たちなど、江戸時代を生き抜いた女性たちの足跡を、さまざまな歴史資料を通して紹介します。

第三部では、鳥取藩士とその妻の悲劇を描いた近松門左衛門の世話物浄瑠璃「堀川波の鼓（ほりかわなみつつみ）」を紹介します。近松の描く人形浄瑠璃の世界と、主題となった女敵討（めがたきうち）にみる武家社会の女と男の関係を読み解いていきます。

江戸社会における女性たちは、儒教倫理、身分、性差といったさまざまな問題に直面しつつも、個々に「美」や「知」を追求し、柔軟に生きていました。そうした姿に、人間としての輝きと力強さを感じていただけることでしょう。

本展は、鳥取ゆかりの女性に関する資料が一堂に集まる初めての機会です。江戸女性の美的感覚に触れていただくとともに、郷土鳥取の女性たちの歴史について理解や関心を深めていただければ幸いです。

（人文担当学芸員　来見田 博基）

特別展　女ならでは世は明けぬ
―江戸・鳥取の女性たち―

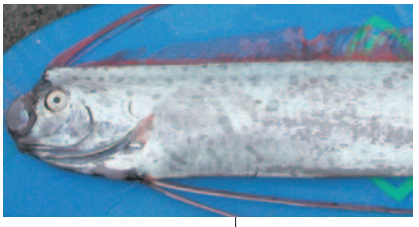
■会　期　**5月14日（日）～6月11日（日）** 無休
■会　場　2階　第1・2・3特別展示室
■入館料　一般 800円（団体・前売り600円）
前売券は4月上旬～5月13日（土）
鳥取県内22ヶ所で販売
■関連行事
・特別対談「**女の民俗、男の民俗**」
5月21日（日）13時～15時
・シンポジウム「**江戸の女性を考える**」
5月27日（土）14時～17時
・映画上映会
松竹映画「**夜の鼓**」（1958年 今井正監督作品）
6月4日（日）14時～15時30分
※会場：いずれも当館2階講堂、無料

企画展

遠い海 ―かつて私たちは海で生まれた。―今，私たちは海のことをどれだけ知っているのだろう。

「海」は生命の誕生した場所です。私たち人間はもちろん、地球上のすべての生きものは海から進化しました。まさに「母なる海」です。また、人間は海から多くの恩恵を受けて生きています。しかしながら、私たちは、海のことをどれだけ知っているのでしょう？　海は、近くして遠い存在であると言わざるを得ないのでしょうか。

そこで、このような母なる「海」のしくみ、そしてそこにすむ多種多様な生物とそのつながりを紹介する展覧会を企画しました。巨大なジンベエザメ、深海のリュウグウノツカイ、海へもどったウミガメ類、そして小さな貝まで、その種類の多さや多様さには目を見張るものがあります。会場内には、たくさんのはく製資料はもちろんのこと、映像コーナー・体験コーナーも設けます。きっと、五感すべてで「海」を感じていただけると思います。また、7月16日（日）午後2時からはシンポジウム『今、明かされるマンボウのなぞ』も開催します。



深海魚リュウグウノツカイ

この夏は、鳥取県立博物館で「海」を感じてください。そして、海を知り、守っていくことの大切さを考えていただく機会となれば幸いです。

（自然担当学芸員　川上　靖）

企画展　遠い海

■会　期　**7月15日（土）～8月27日（日）** 無休
■会　場　2階　第1特別展示室
■入館料　一般 180円（団体150円）
■関連行事
・シンポジウム
「**今、明かされるマンボウのなぞ**
―DNAと形態からせまるマンボウ研究最前線―」
7月16日（日）14時～16時
会場：当館2階講堂、無料

※開館時間：9時～17時（入館は16時30分まで）　4月～10月の土曜日は19時まで開館
※学生以下・70歳以上の方・学校教育活動での引率者・障害のある方、要介護者等及びその介護者は無料
（特別展・企画展共通）

観察ガイド

浦富海岸

浦富海岸は、東は兵庫県との境の陸上岬から西は大谷海岸までの約15kmの海岸です。入り組んだ海岸線と海食地形が特徴で、山陰海岸国立公園（1963年7月国立公園に指定）の中でも屈指の景観をもつ海岸です。特に、鴨ヶ磯から菜種島にかけては、25mにも達する透明度と海中景観の美しさにより、海中公園（1971年1月）に指定されています。

地形を形成する岩石類は主に古第三紀（約6000万年前）の花崗岩類で、羽尾岬、黒島にかけては中新世（約2000万年前）の火砕岩類、駟馳山一帯には鮮新世（数百万年前）の火山岩類が分布しています。また、浦富、牧谷、羽尾、陸上の浜は、花崗岩に由来する砂浜海岸が発達しています。

浦富海岸の景観を観察するには、陸側では主要道路沿いの車での観察と山陰海岸自然探勝路沿いに歩いて観察する方法があります。また、有料ですが遊覧船によって海から観察することもできます。陸側のルートでは、滝ヶ磯、鴨ヶ磯、城原海岸、熊井浜などの代表的な海岸地形や砂浜を気軽に観察できます。また、道沿いに断崖や離れ島等も観察できます。海からの観察は、陸からは見ることのできない雄大な海食地形を観察でき、浦富海岸の美しさを堪能できます。その中でも三ツ大島付近、菜種島付近、羽尾岬、陸上岬の海食崖はとても見事です。また、千貫松島（海食洞門）、羽尾岬の海の竜神洞（海食洞）、菜種五島（海食による離れ島）などの地形は、陸からは見えにくい角度からの観察ができ、海食地形の形成を考える上でとても参考になります。

千貫松島（初夏）

終わりになりましたが、この4月から、岩美町牧谷にある山陰海岸自然科学館が鳥取県立博物館の「山陰海岸学習館」（入館無料）になります（P7参照）。浦富海岸の散策の際には是非お立ち寄りいただき、浦富海岸及び山陰海岸に関わる多くのことを学習していただければと思います。

（自然担当学芸員　平尾 和幸）

菜種島（冬）

資料紹介

巨大オオサンショウウオの液浸標本

オオサンショウウオ（ハンザキ、ハンザケ）は世界最大の両生類として知られ、国の特別天然記念物に指定されています。約3千万年前からほとんど姿が変わらないことから、「生きている化石」とも呼ばれます。山地の清流にすみ、主に夜活動しながら、魚やサワガニ、カエルなどを食べています。しかしその生活の様子はまだ不明な点が多く、今後のさらなる研究が望まれています。

平成15年7月、鳥取県内で飼育されていたオオサンショウウオが死亡し、鳥取県立博物館に寄贈されました。全長143cm、体重はなんと44.3kgもある「ヘビー級」の個体です。これまでの当館の調べでは、体重ではなんと世界一、全長でも世界第5位の記録となります。

いずれにしろ、これはオオサンショウウオの寿命などを解明していくうえで貴重な資料となります。当館では、ホルマリン溶液による液浸標本として、平成16年4月から常設展示室で保管・展示しています。

常設展示では、この貴重な標本をすみずみまで鮮明に観察できるように、特別なケースを製作しました。標本の前後左右、背中はもちろん、お腹側もケースの下に設置した鏡で見ることができます。

オオサンショウウオ液浸標本

これにより、お腹側の「総排泄口」（しっぽの付け根付近にある、裂け目のような穴）や、その周辺の「隆起」（雄の特徴）などが確認できます。

顔を見ると、とても大きな口が目立ちます。餌の動物が近づくと、この口をすばやく開け、水流とともに流れ込む餌をくわえ込みます。反対に眼はとても小さく、視力はあまり良くないようです。餌の接近は、においや水の流れによって察知していると考えられています。

その他、体に比べて小さな手足、ぶつぶつした皮膚の表面など、ケースに顔を近づけてじっくりと観察することができます。この機会に是非ご覧いただき、「清流のヌシ」オオサンショウウオの魅力を堪能していただければと思います。

（自然担当学芸員　一澤　圭）

資料紹介

大正期の太陽系模型

写真のモノは何だと思いますか。

博物館に持ち込まれる資料の中には、一見何であるのかわからないものもあります。しかし、いつ、どこで、誰が、何のために、作り、使ったのか解らないものを展示することはできません。そのため、観察や聞き取り調査を行い、それが何であるかを明らかにしなければなりません。

まずモノをよく見てみましょう。木製で、直径の異なる輪を積んだ上に球を置いた形状をし、赤や緑の彩色が施されています。上から二段目に「水」、四から七段目には、それぞれ「地」「火」「木」「土」の文字を読みとることができます。そして、写真には写っていませんが、底面には「海王星」と記されています。

これで、太陽系を表した模型であることがわかりました。冥王星がないことから、海王星の発見（1846年）から冥王星の発見（1930年＝昭和5年）までの間に作られたものと考えられます。

太陽系模型（高さ12㎝、底部径11.3㎝）

また、寄贈者によると、本来の所有者（寄贈者の祖父）は、明治末から大正頃に鳥取師範附属小学校の教員であったとのこと。

以上より、これが大正頃に同校の理科の授業で用いられた教具であると推測できます。おそらく惑星の順番や軌道を説明するため、真上から見せるようにして使ったのでしょう。太陽系について理解できたかどうか、生徒の感想が残っていないのが残念です。

（人文担当学芸員　石田 敏紀）

コラム

「犬米」のはなし

皆さんは、江戸時代に「犬米」というものがあったことをご存知でしょうか。犬の形をした稲のこと？いいえ。実は、農民に課せられた税の一種で、江戸初期には鳥取藩をはじめ全国の諸藩でみられました。今回は、この知られざる「犬米」の歴史をひも解いてみたいと思います。

そもそも、「犬米」とはどのような税だったのでしょうか。それは、藩主のペットである鷹のエサ代として徴収されたもので、村ごとに納められていました。慶安2年（1649年）の会見郡外江（とのえ）村（現境港市）の史料によると、村高100石につき米5升を納めるものであったことが知られます。32万石の鳥取藩では、単純に計算しても藩全体で年間約400俵（約24t）の「犬米」が集められていたことになります。

それにしても、なぜ「犬米」という名前がつけられていたのでしょう？みなさん驚かれるかもしれませんが、もともと生きた犬を鷹のエサとして納めていたことに由来しています。これは、「犬米」の別名が「御鷹犬餌米（おたかいぬえまい）」と呼ばれていたことからも知られますが、鳥取藩では、江戸時代の早い段階で生きた犬を納めることが中止されました。鳥取藩の『在方御定（ざいかたおさだめ）』という史料のなかに（写真）、寛永9年（1632年）10月、「犬」の納入中止を命じる記録が残っています。この史料には、生犬と一緒に「犬米」も徴集されていたことが記されています。

この特殊な制度は、貞享4年（1687年）に突如廃止されます。廃止の理由はよくわかりませんが、同年4月に江戸幕府が全国に命じた「生類憐（しょうるいあわ）れみの令」に関連していると考えられます。「生類憐れみの令」は、犬の保護をうたったものとして有名ですが、鳥取藩ではこの法令をはばかり、鷹のエサに由来する「犬米」制度を中止することにしたのではないでしょうか。

（人文担当学芸員　大嶋 陽一）

藩が村方に出した法令をまとめた『在方御定』